法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

源氏物語における〈藤壺物語〉の終焉 : 「結ぼほれつる夢」の喩

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
86
(開始ページ / Start Page)
12
(終了ページ / End Page)
23
(発行年 / Year)
2012-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010235

Hosei University Repository

源氏物語における〈藤壺物語〉の終焉

――「結ぼほれつる夢」の喩――

山崎　和子

はじめに

1　かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか

2　とけて寝ぬ寝覚めさびしき冬の夜に結ぼほれつる夢のみじかさ

3　なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ（朝顔②四九四～四九六）[1]

右は源氏物語の朝顔巻末における源氏の歌三首である。薄雲巻における春の藤壺崩御から季節は巡り、冬の雪の夜に紫の上と語らい、1の歌を詠じて眠りについた源氏の夢に「夢ともなくほのかに」現れた藤壺は、「いみじく恨みたまへる御気色」で恨み言を言う。折しも紫の上に起こされた源氏は、身じろぎもせずに臥したまま2の歌を詠む。そして翌朝諸処の寺で御誦経をさせ、極楽往生できずに〈中有〉を彷徨っている藤壺のために、自らも心の内に阿弥陀仏を念じ「おなじ蓮にとこそは」と願った後、藤壺に関わる最後の歌となる3を詠じている。

朝顔巻について藤本勝義氏は「過去を振り返り、その過去にけじめをつける巻であった」と述べて「回顧と喪失の主題化」を捉えている。[2]巻末部についても、清水好子氏の言うように「怨霊になってあらわれる藤壺宮の姿は生前の面影をくつがえすすさまじさがあ」り、源氏が「藤壺の霊安かれと祈る」[3]ことにおいて、「藤壺鎮魂の営みの中に幕を閉じる」（『新全集』）。従来、藤壺物語は薄雲巻の藤壺崩御をもって終わるとも見られていた[4]が、この朝顔巻末で今一度藤壺のことが語られることから、塚原明弘氏が「許されない恋の行方を辿って来た物語は、死別に続いてもう一つの終止符を打った」[5]と述べるように、この巻末が藤壺物語の終焉だと考えてよいだろう。

しかもその終焉は、冒頭の三首いずれもが源氏の亡き藤壺恋

Hosei University Repository

慕の歌であることによって、「藤壺鎮魂」を語るに違いないが、そこには「藤壺の救われがたい罪障を、自らの罪障としてもかかえこまざるをえない」源氏の姿が描かれていると言う。[6] ここでは、冒頭の歌三首、特に従来問題にされることの少ない2の歌における「結ぼほれつる夢」が、源氏と藤壺の密通に関わる比喩の表現であることを考察し、〈藤壺物語〉の終焉を論じていきたいと思う。

一　「かきつめて」と「なき人を」の歌について

2について考察する前に、まず、1・3の歌を見ておきたい。

1「かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか」においては、まず「鴛鴦」が問題となる。本来「鴛鴦」は夫婦の和合を象徴する鳥であることから、吉岡曠氏は「仲のよい夫婦のたとえ」と見た。[7] しかし、鈴木裕子氏は「「独り寝」の孤独を募らせる鴛鴦というメッセージ性」を持ち、理想の夫婦像を語るものではないと述べ、[8] 前述の藤本勝義氏なども、独り寝の悲哀の比喩表現と見ている。今井上氏は、鴛鴦は「ひとり寝」とも「共寝」とも詠われていないことから、二者択一的にではなく、「この源氏歌の持つ曖昧さ、両義性を一首の本性として受けとめるべきではあるまいか」[9] と提示をしている。

平安和歌における〈鴛鴦〉は、藤原冬嗣が死んだ女を恋う歌として「夕されば寝にゆくをしのひとりして妻恋ひすなる声のかなしさ」（後撰集巻二〇哀傷1400）と詠じたものをはじめ、『栄花物語』（巻第九・いはかげ）の長歌には「憂き身を嘆く　をしどりの　つがひ離れて」「番はぬ鴛鴦は　寂しくて」の表現や、特に『狭衣物語』には、出家した女二宮の屋敷に忍び入った狭衣が、まさに1の歌を踏まえたと思われる次の独詠歌を詠んでいる。

4　池にたち居る鴛鴦の音なひ、つがはぬにやと耳とまりたまひて、

我ばかり思ひしもせじ冬の夜につがはぬ鴛鴦の浮き寝なりとも（巻二①二三三）

これらの鴛鴦は、「ひとり」「浮き寝」をする「つがはぬ」鴛鴦であるとともに、1・4の「うきね」は「浮き寝」「憂き寝」「憂き音」を掛詞とし、「鴛鴦のうきね」で、番ではない鴛鴦の妻恋の鳴き声や独り寝の悲哀を浮かび上がらせていると考えられる。

また、1の歌を、高橋亨氏は「外に向けては紫上への返歌でありつつ、心の内では藤壺を偲んでの独詠という、表現の二重化」を捉え、[10] 針本正行氏も、紫の上への答歌であると同時に、「禁忌の恋に生きていた「むかし」を回想し、死霊藤壺の魂へ呼びかける招魂歌ともなっている」[11] と述べ、今井上氏は前述と同様の立場から、「源氏と紫上の融和の場面から藤壺との永別の場面へと」繋ぐ「結節点」となる歌だと捉えている。

この歌が紫の上の「こほりとぢ石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる」への返歌として問題になるのは、源氏の歌に贈答歌特有の呼応する語が見られない点にある。氷に閉じ込められた石間の水と空を澄み渡る月の情景を詠じた紫の上の歌は、通説では「石間の水」に紫上を、「月」に源氏を準え

Hosei University Repository

たと解釈されているのに対し、源氏の歌は、昔恋しい雪の降りしきる夜、耳にした鴛鴦の鳴き声から独り寝の寂しい鴛鴦の姿に、自らを重ねている。両歌は贈答歌の形にはありながら、二人は異なる情景を見、二人の思惟、苦悩がそれぞれの心象風景として描出されている。ここで鴛鴦の鳴き声を耳にした源氏は「かきつめてむかし恋しき」思いに囚われ、その「鴛鴦のうきね」が2の歌の「とけて寝ぬ」に繋がるという、ひたすら藤壺回顧に向かっている。〈独り寝の鴛鴦〉を詠むことで、紫の上の歌とは直接呼応しない独詠的であることが、すれ違う二人の心を際立たせている。

次に、3の「なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ」では、「みつの瀬」が問題となる。「みつの瀬」は「みつせ川」の瀬のこと。『奥義抄』に「渡り川とは三途河をいふ也。みつせ河ともいへり」とある。源氏物語において「みつの瀬」は当該のみ、「みつせ川」「渡り川」が真木柱巻に各一例、他に『道綱母集』などの和歌に見ることができる。

5　源氏おりたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりしを
玉鬘みつせ川わたらぬさきにいかでなほ涙のみをの泡と消えなん（真木柱③三五四～三五五）

6　わづらひ給ひて、
みつせ川浅さのほども知らせじと思ひしわれやまづ渡りなん
返し、
みつせ川われより先に渡りなばみぎはにわぶる身とやなりなむ（道綱母集23・24、新千載集巻一九哀傷歌2170・2171）

5は、鬚黒の手中に落ちた玉鬘に源氏が、私が三瀬川を渡そうと思っていたものをと、未だ執着する心を詠みかけ、玉鬘は死んで三瀬川を渡るより先に涙河の泡となって消えてしまいたいと応じている。6は『新千載集』の詞書によれば、道綱が病を患った際、道綱母が代詠した贈答歌で、背負って渡ろうと思った三瀬川を私はきっと一人で先に渡ってしまうのだろうかという男の嘆きに対し、女は、あなたが先に渡ってしまうならば、私はきっと三瀬川の水際で途方にくれる身となってしまうのでしょうか、と返したもの。返歌の「みぎはにわぶる身」は、男女の立場こそ入れ替わるが、藤壺を見つけることができず「まどふ」源氏の姿と重なる。

「みつの瀬」「みつせ川」は、平安後期の日本における偽撰とされる『地蔵菩薩発心因縁十王経』[12]に見られ、渡る瀬には浅瀬（山水瀬）・深い瀬（江深瀬）・橋の三つがあり、〈死後、女は初めて契った男に背負われて三瀬川を渡る〉とある。前掲論文において塚原明弘氏は、3は当時の「三瀬川」の俗信を背景に、「ままならない男女」の「喪失感漂う」場面での歌であり、「一蓮托生と、その前提としての三瀬川の再会」そのものが、源氏の藤壺との「永訣の慨嘆」を描くものとして用いられていると言う。原岡文子氏は、三途の川で行き暮れる源氏の絶望は、「並ならぬ二人の濃密な関係を証し立てるものにほかなるまい」[13]と指摘し、金裕千氏も「三瀬川の俗信は、源氏と藤壺の密通の関係を改めて照らし返す」「独自の位相」にある[14]と述べている。

源氏は歌の直前に「同じ蓮にこそは」と来世極楽浄土での藤

Hosei University Repository

壺と一蓮托生の願いを語っている。しかし、夫婦ではない二人にその願いが叶うはずもなく、たとえ来世にまで慕って行こうとも、三瀬川の川瀬で藤壺の姿を見ることはできず、きっと途方に暮れ惑うのだろうかと、そうなる可能性を予測しつつ詠じたのが3の歌である。『評釈』（玉上琢弥）は、源氏が藤壺に巡り会うことができないのは、藤壺を「桐壺の帝が背負って渡ってしまっているはずであるから」と言う。この「みつの瀬」において源氏と藤壺の「密通の関係」が問題にされるのは、『拾遺集』における「地獄の形を描きたるを見て　みつせ河渡る水竿もなかりけり何に衣を脱ぎてかくらん」（巻九雑下・菅原道雅女543）や、この瀬で「顧罪低昂」という、罪の高低が決められたという『地蔵菩薩発心因縁十王経』の記述と関連するのではないかと思うが、『道網母集』の贈答歌、源氏物語における「みつせ川」や「みつの瀬」そのものに〈罪障意識〉は読み取れないのではないだろうか。むしろ源氏の3の歌は、藤壺出家の際、源氏が「月のすむ雲居をかけてしたふともこのよの闇になほやまどはむ」（賢木②一三三）と詠じた、藤壺を「したふ」[15]が故に闇に「まどふ」愛執の心と呼応し、共鳴するものである。生前のみならず、藤壺亡き今となってもやはり藤壺を「したふ心」に「まどふ」源氏の強い執着を物語っている。

二　「結ぼほれつる」の解釈

ここからは、2の歌を考えていこう。塚原明弘氏は、源氏物語における「結ぼほる」は、「恋愛の対象となるような姫君たちにとって」「男性と結ばれたことによって生じる物思いや苦悩を示すことば」であり、亡き後の荼毘の「むすぼほる」煙によって象徴されるのは、「むすぼほる」思いゆえにあの世に行きかねて中有にさまよいつづける魂だといえそうである」[16]と述べているが、2の歌への詳しい言及はない。

今日の注釈書では「結ぼほれつる夢」を、

『集成』……結ばれた夢の気がかりなままはかなく終ってしまったことよ。「むすぼほる」は、結ばれる意と気にかかる意とを掛ける。

『新大系』…結んではかなく終った夢

『新全集』…「夢を結ぶ」の意に、心が鬱屈する意を含む。結局、夢が覚めて、たちまち恋しい藤壺の姿が消えた悲しさをいう。

など、いずれも「夢を結ぶ」「結ばれた夢」と捉え、その上に「結ぼほる」には「心が鬱屈する意」（『全集』『新全集』）、「気にかかる意」（『集成』）、「心にわだかまりがあって憂鬱になる、の意」（『鑑賞』）もあると注している。しかし、「安らかに眠ることもならぬ寂しい冬の夜の寝覚めに、はかなく結んだ夢はなんと短かったことよ」（『新全集』）という現代語訳には、「心が鬱屈する意」はまったく反映されていない。歌の眼目は〈はかない夢を見た〉ことにあると見るからであろうが、〈はかなさ〉は「夢」の語による連想であり、「夢のみじかさ」において「はかなく終った」と言える。むしろこの歌では、「結ぼほれつる」が重要な表現であると思われる。

従来にも木船重昭氏は、賀茂真淵（『源氏物語新釈』）の説く

Hosei University Repository

「さて御恨がほなりしことをすへて、むすぼほれたるとはいひ名残をしきゆゑに夢の短さとはいふ也」が「「むすぼほる」の語義に即した解釈」であり、「通説の釈くただ〝結ばれた夢〟ではない。鬱結してとけようもない悔いのみとどめた、あまりにもみじかかった夢」、藤壺に「申しわけするいとまもなく、たちまちさめてしまった夢」のことと述べている。[17]

源氏物語には「結ぼほる」23例、「思ひ結ぼほる」5例、「思し結ぼほる」1例が用いられている。

7 「これはいかなれば、かく結ぼほれたるにか」（胡蝶③一七七）

8 いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ（柏木④二九一）

9 秋はてて霧のまがきにむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔（朝顔②四七六）

10 うちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすぼほるらむ（胡蝶③一九〇）

例7は、柏木から玉鬘への懸想文が「いと細く小さく結びたる」様であったことから、源氏が「手紙の形をいうとともに、差出人の心が「結ぼほれる」（恋のために心が鬱屈している）の意をひびかせて言った洒落」（『新全集』）と注されている。8は柏木が、自分の茶毘の煙が、女三の宮への未練故に「絶えぬ思ひ」となってこの世に漂い残ることを詠じた歌。9は、秋も果てた「霧のまがきにむすぼほれ」ている朝顔の花に自らを準えた、朝顔の姫君から源氏への返歌である。藤田加代氏は、この「霧のまがき」を「自ら女の華やぎを断って孤独に生きる朝顔姫君の、閉ざされた精神空間と生活空間を枠づける心象表現」[18]と捉えているが、その〈閉ざされた精神空間と生活空間〉に在る心の有様を動作・作用概念として捉えたのが「結ぼほる」である。10は、『伊勢物語』四十九段の「うら若みねよげに見ゆる若草をひとのむすばむことをしぞ思ふ」を踏まえ、「ね」は「寝」と「根」の掛詞、「若草」に玉鬘を見立てて源氏が恋情を告白した歌で、ここでも「うちとけ」「むすぼほる」が対比されている。

11 かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすぼほれてや、など推しはかるに、（匂兵部卿⑤二四）

12 さるまじきことどもの心苦しきがあまたはべりし中に、つひに心もとけずむすぼほれてやみぬること、二つなむはべる。（薄雲②四五九～四六〇）

右は、「心にあまるまで」「安からぬ思ひに」「ものをのみ思し」「心もとけず」などと協調する、物思いの様を語るもので、11は薫が、あのきっと亡くなられてしまったのであろう人（柏木）は、母女三の宮との密通により生じた、人には語ることのできない鬱屈する思いに囚われていたのではないかと推測する例。12の「二つ」は、今も源氏の心にわだかまりとなって残る、六条御息所と藤壺とのことを指し、「つひに心もとけずむすぼほれてやみぬる」とは、源氏と六条御息所、源氏と藤壺の心のわだかまりが消えることなく、鬱屈した思いを抱いたまま亡くなってしまったことを言う。つまり「結ぼほる」は、「文・煙・心・思ひ・本性・霜・つらら・朝顔・若草・夢」などを主体とし、「解く」との対語関係において、閉塞的に凝固し鬱屈す

Hosei University Repository

る主体の有様そのものであるとともに、心の様を語る語である。2において藤壺の夢を見た源氏は危害を加えられるような感じがして、目覚めても動悸が収まらず、涙も流れる寝覚めの寂しさを味わい、藤壺は「うき名」の顕れたことが「恥づかし」みっともないと語っていることから、この「夢」が漏れてはならない二人の密事に関わる内容であったことは確かである。それ故「結ぼほれつる夢」は、単に「夢を結ぶ」「結ばれた夢」のことではない。直前の「むかし」によって喚起された源氏と藤壺の密通・不義の子誕生に関わる〈鬱屈し、閉ざされた思いの夢〉である。それはまさに12で「心もとけずむすぼほれてやみぬること」と語られた「二つ」のうちの一つであり、11の女三の宮との密通故に生じた柏木の「むすぼほれ」た「安からぬ思ひ」とも共通する懊悩を抱えた夢であった。しかも2には、積極的、行動的動作を表す動詞に下接することの多い助動詞「つ」[19]が下接していることは、行為の主体が意図的に心を閉ざし、鬱屈する状態にしていたという確認判断を表す。従って、「結ぼほれつる」は、塚原氏の説く「物思いや苦悩を示すことば」として、清水婦久子氏が「自ら凍結したような、解放されない思い」の「頑なな心[20]」と述べるところの、自ら積極的に閉塞し鬱屈する心の有様を語るのである。

三　〈夢〉と〈うつつ〉の交錯

次に、源氏物語における「夢」「御夢」143例は、1睡眠時に見るもの、2古代的な神託を揺曳させるもの、3恋の表現におけるはかない逢瀬や、4「うつつ」のこの世を比喩的に表す語として用いられている。3・4には、「夢のやう」25例、「夢の心地す」23例など、「夢」と対比される〈うつつ〉の認識を基底に置きつつ、〈うつつ〉の時空を「夢」に準え、〈夢のような現実〉世界を語る比況の表現がある。

本来睡眠中に見る「夢」は覚めるものであり、覚めてしまうからこそはかない夢を追慕し、覚めては「忘られず恋しきものは春の夜の夢の残りをさむるなりけり」（貫之集641）と、「夢の残り」がこの上もなく愛おしく思われる。また、〈うつつ〉が「夢の心地し」「夢のやう」であるならば、〈夢〉と〈うつつ〉の境界は曖昧になり、〈うつつ〉が〈夢〉ということにもなる。『古今集』では、「あひしれりける人のみまかりにける時によめる　寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつつとは見ず」（古今集巻一六哀傷歌・壬生忠岑835、忠岑集63）、「寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢にはありける」（古今集同・紀友紀833）、赤染衛門が〈維摩経十喩（まぼろしのごとし）〉において「夢や夢うつつや夢とわかぬかないかなるよにかさめむとすらん」（赤染衛門集459）と、「夢」「うつつ」を交錯するものとして詠じ、『堤中納言物語』にも「人は夢まぼろしのやうなる世に、たれかとまりて」（虫めづる姫君）と語られるところの、はかない〈うつつ〉認識の系譜がある。

源氏物語においても、定めなくはかないこの世や男女の逢瀬、人の死が、比喩的に「夢」と語られており、御法巻では紫の上の死を「明けぐれの夢」（④五〇六、五一二）と語るように、

Hosei University Repository

現実とは認めがたく受け入れがたい、〈うつつ〉と語るには憚られる事象を「夢」と表象した。入水を決意した浮舟が母にあてた辞世歌の一つ「のちにまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に心まどはで」（浮舟⑥一九五）と詠じた「この世の夢」は、匂宮と通じ、薫との間で揺れた日々は、〈うつつ〉ではありながら、しかとした実体を認識しがたい〈夢〉のような〈うつつ〉であったことを言う。従って2の歌でも、「むかし」により回顧された源氏と藤壺の〈うつつ〉は、〈禁忌の恋〉〈密通〉〈罪の子誕生〉更には〈皇統の侵犯〉という、到底人には語ることのできない罪意識において、孤独で閉塞的に鬱屈する心を抱えた〈うつつ〉であったことを、「結ぼほれつる夢」に込めていたと思われる。しかも「夢」は、男女の逢瀬を表象することにおいても、源氏と藤壺の〈禁忌の恋〉を形象化し得る語であった。

前述の金裕千氏が「三瀬川の俗信は、源氏と藤壺の密通の関係を改めて照らし返す」と言うのも、実は「みつの瀬」を詠じる前に、「結ぼほれつる夢」と二人の密事を形象化したことによるのではないだろうか。生前藤壺は出家し勤行に努めてはいたが、この世でその「濁り」をすすぐことはできず、死後に「知る人なき世界」を彷徨い苦しい目にあっているのも、「この一つ事」である源氏との密事によること以外の何ものでもない（朝顔②四九五～四九六）。夢の後源氏は、「罪にもかはりきこえばや」と「罪」を明確に意識しているが、藤壺と源氏の罪は、須磨退去を決めた源氏が藤壺に「思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる」（須磨②一七九）と語ったように、二人の密通そのものが、天罰を受けてしかるべき罪科として畏懼され、二人の罪障意識の基底をなすものであった。

四　哀傷の「夢」

ところで、当時人々が亡き人の夢を見て、歌に詠むことで哀悼するという哀傷歌の世界があった。源氏物語で夢を見た後に歌を詠まれているのは藤壺と常陸宮である。常陸宮の場合は、昼寝の夢に父宮を見た末摘花が、「亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ」（蓬生②三四五）と詠じて、「夢」の語は用いていないが、涙に濡れて父を偲んでいる。2の歌も単に源氏が亡き藤壺の「夢」を見た、そのことを語るのみならず、やはり藤壺を哀悼するものであったと思う。

13　昔ものなど言ひ侍りし女の亡くなりしが、あか月がたに夢に見え侍りしかば
　命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬ夢の覚むるなりけり（忠岑集41、古今集巻一二恋歌・壬生忠岑609には詞書がない）

14　宮の御前かへすがへす思し歎かせたまひて、大殿籠りたる暁方の夢に、院のほのかに見えさせたまひければ、
　逢ふことを今は泣き寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき
　とて、いとど御涙堰きあへさせたまはず。（栄花物語巻第十・ひかげのかづら）

13は詞書のない『古今集』では「恋歌」に所収されているが、

Hosei University Repository

『忠岑集』の詞書から哀傷歌である。亡き女の夢が途中で覚めてしまった悔しさは「命にもまさ」ると詠じている。14の一条院亡き後、一月一五日の御念仏の日、院を夢に見た彰子も、泣き寝の夢でしか逢うことの叶わぬ夫を偲んでいる。これらの人々と同様に源氏も、藤壺の夢が覚めてしまったことをこの上もなく口惜しく思い、涙を流しながら2の歌を詠み、際限のない悲しみに沈んでいた。逆に、紫の上への深い哀惜と鎮魂を語る幻巻には、『白氏文集』（巻一二「長恨歌」）の「魂魄不曾来入夢（魂魄曾テ来リテ夢ニ入ラズ）」を踏まえて「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ」（幻④五四五）と、夢にさえも現れ来ない紫の上の魂を幻術士に探してほしいと訴える源氏の歌がある。この世で亡き人を見る夢ははかない。しかし、人々がせめても亡き人と再会できるのは夢である。人々は亡き人の夢を見ては、懐かしくもつらい悲しみの心を歌に託した。

源氏物語においては、この世に留めた「恨めし」「あはれ」「つらし」などの「一念」「執」「心の執」によって往生できず、亡き魂は「長き夜の闇（長夜の闇）」を彷徨うのだと語られているが、死後夢枕に立つ人物には、夕顔、桐壺院、常陸宮、藤壺、柏木、八宮がいる。六条御息所は明らかに物の怪として源氏の夢ともうつつとも言い難い意識の中に出現するが、この時の藤壺も「すさまじ」いもの、怨霊化しうるまがまがしいものとして捉えられている。[21] 夢枕に立つ死霊は、夢を見た人物がその人を心に思っていたり、話題にした上で就寝し、うたた寝をした時に現れることが多く、藤壺も源氏が紫の上と往時を語り合い、「かきつめて」の歌を詠じて藤壺のことを思いつつ床に就いた、その時であった。生前藤壺は若紫巻で、永遠に覚めることのない「夢」の中に密通したわが身、わが罪を封印したいと願い、密通が露顕し「世語り」になることを怖れていた[22]が、源氏は藤壺が「この一つ事」のために、この世での罪をすすぐことができなかったと思い、藤壺自らも臨終間際、冷泉帝に源氏が父親であることを知らせていないことが、死後「うしろめたくむすぼほれたる」（薄雲②四四五）思いとなって残ることを語っていた。直截には冷泉帝に実父が源氏であることを知らせなかったことに対する〈心の執〉であるとしても、藤壺は源氏との密通の罪を背負い、この世に鬱屈した思いを残していた。その妄執のため死後「知る人なき世界」を彷徨っていた。ここで源氏に紫の上との間で話題にされたことによって「呼びだされた」（注21に同じ）藤壺は、封印したはずの二人の密事が漏れて「うき名」が顕れてしまったから、「恨み」「恥づかし」「つらし」という情念において、源氏の夢に立ち現れたのだと語るが、それは源氏側から言えば、薄雲巻で僧の密奏により秘密を知った冷泉帝の不審な態度から、源氏が藤壺に対して「いとほし」、申し訳ないという思いを抱いていた（②四五七）、その心の呵責が夢の形をとって顕在化したものであろう。

源氏の歌は、〈うつつ〉のこの世や男女の逢瀬を「夢」と表象する比喩表現と、亡き人の夢を見て哀悼する哀傷歌の世界によって、〈禁忌〉故に閉ざされ鬱屈する心を抱えていた〈うつつ〉を「夢」と回想したものである。松井健児氏は2の歌は「藤壺への哀傷歌」、3は「藤壺への鎮魂歌」[23]と捉え、前述の針本

Hosei University Repository

正行氏も、2は「紫の上を「をそ」[23]う死霊の魂を鎮めよう」とする源氏の言葉として機能し、「結果として死霊藤壺の怨霊化も回避させる鎮魂歌となっている」と述べるなど、これらの歌を含む巻末表現が哀傷、鎮魂を語っていることは、清水好子氏以来指摘する通りである。しかしながら、源氏の見た「夢」が右の哀傷歌と異なるのは、二人の密事に関わる畏懼するべき内容であったがために、「結ぼほれつる」という、閉塞する〈冬の夜の夢〉と表象されたところにある。

五　〈冬の夜の夢〉の喩

最後に、〈冬の夢〉について考えてみよう。源氏物語において、「結ぼほる」と「夢」の呼応、或いは〈冬の夜の夢〉を語るのも2の歌のみである。『新編国歌大観』（CD―ROM版）を検するにも〈冬の夢〉を詠じたものは数少ない。

15　ぬるごとに衣をかへす冬の夜の夢にだにやは君が見えこぬ（順集冬31）

16　風に散る木の葉みだるる露霜に結ぼほれゆく冬の夜の夢（夫木抄巻一六冬一・冬6497）

15は、平安朝においてただ一首「冬の夜の夢」と詠じた源順の歌である。16は、俊成卿女が、露霜の凝固していくイメージに重ねて、心の鬱屈する「冬の夜の夢」を詠じたもので、源氏物語の2の歌の影響下に詠出されたかのように、「冬の夜の夢」と「結ぼほる」が呼応している。『夫木抄』にはもう1首、「神無月」の明け方に見るともなく見る〈冬の夢〉を、木の葉に閉じ込められ凝固する様に準えた藤原家隆の歌（巻一六6533）がある。

和歌には多くの「夢」が詠まれているにも拘わらず、『古今集』『拾遺集』には、季節を冠した夢の歌が見られない。『古今六帖』には春2首、秋1首、『後撰集』に春3首、夏1首があるが、冬の夢詠はない。平安中期頃までの私家集でも、春11首、夏1首、秋2首があるが、冬の夢は右の『源順集』の1首のみである。多く見られるのは、「寝られぬをしひてわが寝る春の夜の夢をうつつになすよしもがな」（後撰集巻二春中76）、「春の夜の夢のなかにも思ひきや君なき宿をゆきて見んとは」（同巻二十哀傷1387）など〈春の夜の夢〉詠である。「春」「恋」「哀傷」の部立に各1首見られる『後撰集』において、七六番歌は「寝られぬをしひて寝て見る春の夜の夢の限りは今宵なりけり」（貫之集第五恋656）の「詠み換えであろう」（新大系『後撰和歌集』脚注）とされるように、部立は「春」であるが、『貫之集』と同じく恋歌であろう。恋歌では、「春の夜の夢」は恋しい人に逢うことのできる甘美な夢であった。ところが一三八七番歌は、詞書に「兄の服にて、一条にまかりて」とある哀傷歌で、はかない「春の夜の夢」は一方では人の死を連想させる表象でもあった。

源氏物語には〈春の夜の夢〉も〈秋〉〈夏〉の夢詠もなく、朝顔巻例のみが〈冬の夜の夢〉を、「結ぼほれつる」と詠じている。[24]源氏物語以前、『源順集』の一首は、衣を返すまじないを夜毎にして訪れを待っても、夢にさえ現れない男の薄情さを嘆いたもので、冷え冷えとした「冬の夜の夢」には孤愁が醸成

Hosei University Repository

されるが、そこに比喩の表現性はない。若紫巻の密通の後、源氏と藤壺が異質な「夢」を詠み合うことによって、二人の重ね合わせることのできない心と存在が示され、藤壺はわが「宿世」を「心憂し」「あさまし」と受け止めていた。源氏の恋情に危惧を抱き出家した後も、藤壺と源氏は「なでしこ」（愛し子）である東宮（冷泉帝）を介して、「運命共同体」[25]という意識を持っていた。しかし、鈴木日出男氏はこの二人の「共同関係」すら、「たがいに心開けるような自由さとはまったく対極のところにあった」、「彼らはたがいに、日常の時空では己が情動を非日常の密室に封じこめるほかなかった」「憂愁」を抱える人生であったと述べている。[26]

この「非日常の密室に封じこめ」られた「憂愁」こそが、「心の中に飽かず思ふこと」（薄雲②四四五）、「心に飽かずおぼゆること」（若菜下④二〇六）として、生涯藤壺と源氏の心に内在していた情動であり、源氏が「結ぼほれつる」と詠じた内面世界である。氷に閉ざされた冬の雪の降りしきる夜、〈うきね〉に孤愁を噛みしめる源氏の回想する「結ぼほれつる夢」は、藤壺と源氏が密通と罪の子誕生の秘密を抱えて鬱屈する思いに生きた、閉塞的で孤独な〈うつつ〉の精神世界を表象する、独自の象徴表現である。その「夢のみじかさ」も、藤壺が三十七歳という早世であったことに繋がると思う。

おわりに

薄雲巻の春、藤壺崩御の際に源氏は、墨染の桜とともに、落日の光景に象徴される「入日さす」の哀傷歌により深い哀悼と愛慕の心を詠じた。[27]そして、季節の巡った冬のこの夜、紫の上と往時を語り、回顧される藤壺恋慕に安眠することができない〈うきね〉の夢に藤壺を見た。その「結ぼほれつる夢」は、従来の解釈のように、はかない「夢を結ぶ」「結ばれた夢」を詠じたものではない。夢の内容が密通に関わる閉塞的鬱屈感を伴うものであったことを語ると同時に、藤壺との密通・罪の子誕生の秘密故に、閉塞的鬱屈感を内包して生きてきた〈うつつ〉を回想するものであった。藤壺が若紫巻で「醒めぬ夢になしても」と語り始め、源氏が冬の夜に「結ぼほれつる夢」と回想する「夢」は、源氏と藤壺の物語を語る上で呼応する「夢」であり、二人の〈禁忌の恋〉を形象化するキーワードである。しかも、この閉塞的に鬱屈する精神世界を形象する〈冬の夜の夢〉は、源氏に密通の罪意識を再確認させるものであった。[28]

朝顔巻に続く少女巻冒頭は「年かはりて、宮の御はても過ぎ」た初夏の卯月、物語は夕霧物語に転じている。従って、朝顔巻末は冒頭にも述べたように、「過去を振り返り、その過去にけじめをつける」ことにおいて、〈藤壺物語〉の終焉を語るものである。源氏が独り寝の悲哀を言う「鴛鴦のうきね」に今も藤壺を慕い、冬の夜の「結ぼほれつる夢」に回想される藤壺を来世にまで慕って行こうとも、夫婦ではない二人が同じ蓮の上に乗ることはおろか、契り合った男女が共に渡る「みつの瀬」ですら再会することは叶わない。しかし、この後藤壺の霊が現れないことから、死者藤壺にとって冒頭に示した2・3の歌は鎮魂歌として作用するものであっただろう。「醒めぬ夢」のまま

Hosei University Repository

「結ぼほれつる夢」として今一度回想された〈藤壺物語〉は、〈禁忌〉であるが故に密通の罪意識と、愛執故に永遠に救済されることのない深い喪失感に惑う源氏の姿を語ることによって閉じられたと考えられる。

注

(1) 用例は、『伊勢物語』『源氏物語』『堤中納言物語』『狭衣物語』『栄花物語』（新編日本古典文学全集）、『新編国歌大観』（角川書店）、『源氏物語新釈』（『賀茂真淵全集』続群書類従完成会、一九八二年）、『奥義抄』（日本歌学大系第一巻、風間書房、一九五七年）による。『源氏物語評釈』（玉上琢弥）「日本古典文学全集」「新潮日本古典集成」「新日本古典文学大系」「新編日本古典文学全集」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』は略称した。

(2) 藤本勝義「回顧と喪失の構造――「朝顔」巻――」（『源氏物語の人　ことば　文化』新典社、一九九九年）

(3) 清水好子『源氏の女君　増補版』（塙書房、一九六七年）

(4) 加納重文『源氏物語の研究』（望稜舎、一九八六年）では、「藤壺物語は薄雲の巻で終末をつげる」とする池田亀鑑（初出は、季刊文芸誌『望郷』第八号、一三三頁、一九四九年六月）や、風巻景次郎（『源氏物語の成立』風巻景次郎全集第4巻、桜楓社、一九六九年）の見解に賛意を寄せている。池田亀鑑『新講源氏物語』（至文堂、一九五一年）では、朝顔巻を最後と見る。

(5) 塚原明弘「かげ見ぬ三の瀬にやまどはむ――三瀬川の俗信と「朝顔」巻末の余韻」（『国文学　解釈と教材の研究』二〇〇〇年七月）。「三瀬川」については、「三瀬川を渡る時――『源氏物語』の浄土信仰――」（『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四年。初出は『王朝文学史稿』第二十号、一九九五年六月）もある。

(6) 鈴木日出男「藤壺から紫の上へ――「朝顔」巻論」（『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年。初出は『源氏物語試論集　論集平安文学4』勉誠社、一九九七年）

(7) 吉岡曠「鴛鴦のうきね（下）――朝顔巻の光源氏夫妻――」（『中古文学』第一四号、一九七四年一〇月）

(8) 鈴木裕子「源氏物語の歌ことば――朝顔巻の光源氏と紫の上――」（『想像する平安文学』第4巻、勉誠出版、一九九九年）

(9) 今井上「氷閉づる月夜の歌――朝顔巻の和歌の解釈をめぐって――」（『源氏物語，表現の理路』笠間書院、二〇〇八年）

(10) 高橋亨「物語想像力の根源――夢・もののけ・中有」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年）。注6鈴木日出男のように、「孤立する自分を包摂している自然を詠んだ歌」（五五二頁）と解するものもある。

(11) 針本正行「光源氏の独詠歌」（『平安女流文学の表現』おうふう、二〇〇一年）

(12) 『新全集』の漢籍・史書・仏典引用一覧（②五〇九頁）にも訓読したものがある。

(13) 原岡文子「朝顔巻の読みと「視点」」（『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年。初出は『共立女子短期大学文科紀要』一九八七年二月）。注6鈴木日出男も「罪障を思いつつも、藤壺とともに極楽の蓮の上によみがえりたいと願った歌」と述べている。

Hosei University Repository

(14) 金裕千「朝顔巻末の「みつの瀬」をめぐって――藤壺追慕と罪の救済――」(『文学・語学』二〇〇〇年五月)

(15) 「したふ」は、単に恋しく思うのみならず、〈下・追ふ〉が語源かとされる(『岩波古語辞典』)ように、強く心惹かれて、後を追い行く愛着の行為を表す。

(16) 塚原明弘「「むすぼほる」思いの物語」(『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四年)

(17) 木船重昭『源氏物語の研究 続』(大学堂書店、一九七三年)

(18) 藤田加代「霧のイメージ」(『源氏物語の「表現」を読む』風間書房、一九九九年。初出は、「『霧の籬』考――源氏物語における自然把握の方法――」『日本文学研究』第32号、一九九五年三月)

(19) 山崎良幸『日本語の文法機能に関する体系的研究』(風間書房、一九六五年)

(20) 清水婦久子「朝顔の巻の女君」(『源氏物語の風景と和歌』和泉書院、一九九七年)

(21) 従来、注3清水説があり、藤井貞和『源氏物語論』(岩波書店、二〇〇〇年)も、「怨霊そのものの出現としてある」(三四八頁)と述べ、藤壺の怨霊は宵居の僧都の密奏により冷泉帝に知られたことを恨んで出現したとする。

(22) 拙稿「藤壺の「醒めぬ夢」」(『日本文学誌要』第七二号、二〇〇五年七月)

(23) 松井健児「源氏物語独詠歌における浄化の希求――罪意識による独詠歌――」(『王朝文学史稿』第十号、一九八三年二月)

(24) 漢詩の引用には、須磨で雪の降り荒れる冬、源氏が琴を弾き「霜の後の夢」と誦じる(須磨②二〇八)例がある。大江朝綱の七言律詩「王昭君」の頸聯「胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸(胡角一声霜の後の夢 漢宮万里の月の前の腸)」(『和漢朗詠集』「王昭君」(冬701))によるもので、胡に嫁がされた王昭君の寂寥、孤独、望郷の思いを託す「霜の後の夢」は、政界から失脚し須磨に流離した源氏の失意、孤独、都への思いと重なる、霜夜の〈冬の夢〉である。

(25) 森一郎「藤壺の実像」(『源氏物語作中人物論』笠間叢書133、一九七九年)

(26) 鈴木日出男「天上の恋――藤壺と光源氏(一)」(『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年)

(27) 拙稿「輝く日の宮の〈落日〉――哀傷歌の象徴性――」(『中古文学』第八一号、二〇〇八年六月)

(28) 鈴木日出男「天上の女藤壺」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九三年一〇月)が、若紫巻の源氏と藤壺の贈答歌における「「夢」、あるいはそこから導かれる暗闇が、源氏と藤壺をつなぎとめる紐帯となっている」、源氏と藤壺の物語は「暗い無彩色の密室的な場面を構成している」と述べるのも、藤壺の「醒めぬ夢」が覚めぬままに、源氏の言う「結ぼほれつる夢」として継続されたことに繋がる見解ではないかと思う。

付記

本稿は、二〇一〇年法政大学博士学位論文として受理されたものの一部をまとめたものである。

(やまざき かずこ・本学兼任講師)